

巻頭言

第73回日本放射線技術学会総会 学術大会を開催して

第73回日本放射線技術学会総会学術大会 大会長
金沢大学医薬保健研究域

宮地 利明



宮地 利明 先生

1. JRC2017開会

日本ラジオロジー協会 (JRC : Japan Radiology Congress) 主催のJRC2017が2017年4月13日 (木) から16日 (日) の4日間にわたってパシフィコ横浜において開催されました。本大会は日本医学放射学会 (JRS), 日本医学物理学会 (JSMP), 日本画像医療システム工業会 (JIRA) と日本放射線技術学会 (JSRT) の共同開催です。大会の日本語テーマは「極めよう放射線医学, 広げよう放射線診療」で, 英語テーマは“To the Summit of Radiology, To the Horizon of Radiology”とし, これを実現しようと各団体とその実行委員会が創意工夫して本大会を準備してきました。そして国際医用画像総合展 (ITEM : International Technical Exhibition of Medical Imaging) の開場を告げるテープカットを行った後 (Fig.1), 大会の始まりを象徴するJRC2017開会式を迎えました。開会式ではプロのオーケストラ演奏と各団体を繋ぎ合わせる印象的な動画が流れた後, 大友邦JRC代表理事が挨拶しました。続いて各団体代表として角谷真澄JRS会長 (信州大学), 著者, 野田耕司JSMP大会長 (放射線医学総合研究所), 小松研一JIRA会長が基調講演をしました。各講演にはそれぞれの哲学が出ていて, 感心して聞き入っていました。その後の合同特別講演では元サッカー日本代表の中田英寿氏のスペシャルトークがあり, あの巨大なMain Hallが聴衆で溢れていました。海外の学会要人がJRCの大会をアジアの北米放射線医学会と称していましたが, 参加者の職種の割合はともかく大会規模に関してはまさしくそのとおりであり, ITEM入場者は22,810名 (期間中延べ47,745名) と過去最多を記録して大盛況でした。ちなみに

JSRT 総会学術大会の参加者は4,827名 (Web参加を含む) で前年比微増でした。我々の領域においてこれだけ大規模の学術集会は世界でも希なことを再認識しました。JRC2017開会イベントの締め括りとして合同会員懇親会を開催しました。鏡開きには, 信州で大変有名な真澄が出ました (Fig.2)。もちろん出たのは角谷真澄JRS会長ではなく真澄という銘柄の酒で, 飲むと重みを感じると言われています。



Fig.1 国際医用画像総合展のテープカット
左から小松研一 JIRA 会長, 著者, 大友邦 JRC 代表理事, 角谷真澄 JRS 会長, 野田耕司 JSMP 大会長。



Fig.2 合同会員懇親会における鏡開き
左から角谷真澄 JRS 会長, 著者, 野田耕司 JSMP 大会長, 大友邦 JRC 代表理事。

2. 本大会のポリシー

我々 JSRT 総会学術大会実行委員会は (Fig.3), 本大会を「この研究は唯一無二の研究なり」かつ「この医療は唯一無二の医療なり」を象徴する場にしようと考えました。そして「この大会は唯一無二の大会なり」を達成する気概で準備し、この「唯一無二の大会」を Prime Meeting (prime が「最重要の、根本的な、最初の」意味を有するため) と表記してきました。なお本大会は西暦 2017 年かつ平成 29 年の第 73 回大会であり、これら 2017, 29, 73 の数は素数、英語にすれば prime number です (なんと JSMP の 113 回大会も同様)。これらがみな prime number である確率はごくわずかであり、prime number は数学だけでなく情報学や情報工学など、我々と近い学問領域において極めて重要な数です。本大会を Prime Meeting と称したのは、この偶然性の意味合いも込めたためです。

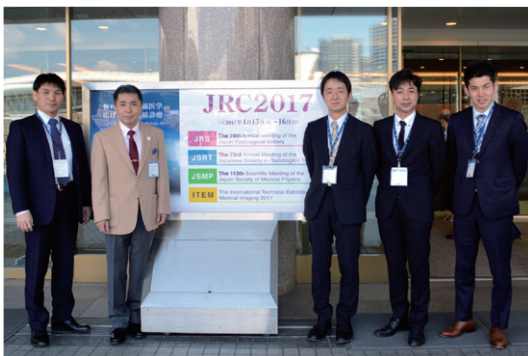


Fig.3 JSRT 総会学術大会実行委員会のメンバー
パシフィコ横浜会議センターの入り口において。左から
武村哲浩 実行委員、著者、松原孝祐 実行委員長、木藤善
浩 実行委員、大野直樹 実行委員。

3. 本大会の三本柱

本大会では国際化、学際化、女性男性共同参画の 3 本柱 (西年にかけて我々は“Tri-pillars” と称しました) の企画が必要不可欠であり、その上で各柱が有機的に繋がらなければならないと考えました。具体的には、大会長企画シンポジウム「リーディングウーマンと考える放射線技術学」では、女性男性共同参画を意図してパネリストをすべて女性にだけでなく、国際化を推進するためにパネリストとモデレータのほとんどを海外から招聘し、講演および討論はすべて英語にしてもらいました (Fig.4)。さらに各パネリストの専門領域も学際性を考慮して、放射線技術学領域以外の研究者にもお願いしました。講演の中で女性が研究者として成功するための

秘訣や要件を理路整然と分かりやすく説明されるなど、大変興味深いシンポジウムであり、女性だけでなく多くの男性も参加していました。また今最もホットな人工知能・深層学習に関する実行委員会企画シンポジウム「AIの放射線医学・技術学への挑戦 - IBMワトソンとディープラーニング -」においては、まさしく学際性の必要性を明確に表す内容で、JSRT 会員以外の聴衆も沢山詰めかけていました。特にこのシンポジウムの目玉として米国から招いた IBMワトソンの開発者は女性であり (Fig.5)、先の Tri-pillars を十分に意識したものです。



Fig.4 大会長企画シンポジウム「リーディングウーマンと考える放射線技術学」のモデレータとパネリストら
左からモデレータの森岡茂晃氏 (Philips Electronics Singapore)、著者、パネリストのKhin Khin Tha氏 (北海道大学大学院)、モデレータの田中利恵氏 (金沢大学)、小倉明夫 JSRT 代表理事、パネリストのChiung-Wen Kuo氏 (Yuanpei University of Medical Technology) と Ching-Ching Yang氏 (Tzu Chi University of Science and Technology)、松原孝祐 実行委員長。



Fig.5 実行委員会企画シンポジウムで講演した IBMワトソン開発者の Tanveer Syeda-Mahmood氏 (IBM Almaden Research Center)。

4. 国際化の浸透

国際化、学際化、女性男性共同参画の Tri-pillars と述べつつ、やはり特に意識したのは国際化です。大会の国際化は着実に進んでいて、大会英語ホームページの Welcome Letter で “This meeting is an international meeting and one of the leading events in radiological technology” (放射線技術学を主導す

る国際学術集会)と宣言しました。また本大会からネームカードの氏名(degreeも含めて)と施設名を英語で併記するようになりました。これはJRC共通の変更事項です。英語併記は海外からの参加者に好評でしたが、ネームカードに手書きで日英併記するとどうしても書き難く読み難くなるため、将来的には英語表記だけをプリントするなど、改善の余地があると思われました。

演題発表においては口述発表の約45%が英語発表となり(スライドの100%英語化は昨年から継続)、JSRTの目標値を上回りました。英語発表に伴うJSRT会員の負担の大きさは重々承知していますが、その負担を凌駕する会員の理解と未来を見据えた志向が、学会の国際化を支えていることを再認識しました。なおJSRTでは、抄録の英文チェックを含めて英語発表のための様々な支援事業を継続的に実施しています。本大会の英語発表を契機に沢山の会員が世界に飛び立って、JSRTの存在を世界中にアピールされることを願っています。また演題発表者の英語発表の負担を軽減するため、新たに「発表者用メモ表示」(PowerPointの発表者ツールの一部機能に相当)の機能を使用できるようにしました。これもJRC共通の変更事項です。発表者用メモ表示の機能や使い勝手は改良を重ねる必要があるものの、発表者用メモ表示によって演題の英語発表の負担が大きく軽減されたと聞いています。

本大会において国際化を進める上で問題点も幾つか出ました。例えば特定の国からの応募演題で、研究自体は高い評価でもJSRTの倫理規定に抵触したために不採択になった演題が沢山ありました。海外からの演題申し込み者に対して、本学会倫理規定の周知と理解を得ることが必要不可欠です。この他、発表のキャンセル等の問題もありましたが、総じて海外からの発表者は年々増加して、海外の学会役員を招聘していた時代から本来の国際学会の形態に向かいつつあります。そこで本学会国際化に貢献した方々に対して新設された賞(国際貢献賞: International Contribution Award)を会期中の総会で授与することになり、Meng Li氏(CSIT)、Jung-Min Kim氏(KSRS)、川村義彦JSRT名誉会員の3名が表彰されました。

一般演題に加えて前述したシンポジウム以外でも合同シンポジウム「小児画像診断における被ばくの

現状と課題」や、JSRT-JSMPジョイントシンポジウム(RPT誌10周年特別企画)「Radiological Physics and Technology - 物理・技術の協調と将来 -」など、海外の高名な学者を招聘した最先端の学術講演はいずれも会場が満席状態であったことから、学会の国際化が確実に会員に浸透していると言えます。もちろんこれらイベントが実現できたのは、関係諸氏の計り知れない支援があったからこそです。

5. その他の新規の取り組み

最新の放射線技術学に関する講演やシンポジウムだけでなく、教育講演も基礎から学べる放射線技術学など、入門から応用に至る講座を充実した結果、多くの会場が高い収容率となりました。これらの講演や演題発表の中で満席のために会場に入ることができない場合に、端末視聴ルームにおいて出席者が視聴できるようにしました。これはJRC共通の取り組みでイヤホンも用意しました。

今回からJSRT会員に限って総会学術大会の予稿集の電子版をすべてダウンロードできるようにしました。これも好評を博しています。

またNext Generation Session(学生セッション)においては、これまでは学生が一般演題として発表する内容の要約版をもう一度このセッションで発表していましたが、今回は学生の研究概要発表コンテンツの形式にしました。次代を担う学生会員の研究に対する熱意が直に伝わり、素晴らしい発表ばかりで大変頼もしく感じました(Fig.6)。



Fig.6 Next Generation Sessionにおける受賞学生と著者。

6. JRC2017閉会

会期中はほぼ好天に恵まれるとともに桜の見頃と重なり、嬉しい限りでした。

JRS2017の閉会式は松原JSRT実行委員長(金沢

大学)の司会のもと、JRC関係諸氏から成るプロ級のオーケストラの演奏で始まりました。次に学会毎に表彰式を行った後、大友邦JRC代表理事の挨拶、続いて各主催者がお礼のスピーチをしました。そして来年開催されるJRC2018の各学会の主催者が挨拶をして閉会しました。

JRC2017という学術の祭りにおいて角谷眞澄 JRS 会長、野田耕司 JSMP 大会長、小松研一 JIRA 会長、JRC 理事会と事務局、各学会の実行委員会および各団体の事務局と役員諸氏が力を合わせて、JRC オールジャパンとして大会の神輿をしっかり担いで大会テーマの一つ“summit (頂上)”に向かって登り切った気がします。これらの方々を含めJRC2017開催に力を貸して下さった関係諸氏、大会に参加して下さったすべての皆様に、第73回JSRT 総会学術大会 実行委員会を代表して深謝します。

特にJSRTにおいては小倉明夫代表理事をはじめ役員諸氏、大会開催委員会、プログラム委員会、学術委員会、教育委員会、国際戦略委員会等の全委員会の皆様に大変お世話になりました。過去のJSRT大会の大会長と実行委員長、JSRT事務局、中部支部の役員諸氏からも大変有益な助言を頂きました。ありがとうございました。

行き届かない部分ばかりの大会長を全面的にサポートしてくれた松原孝祐 実行委員長、大野直樹 実行委員(金沢大学)、木藤善浩 実行委員(信州大学医学部附属病院)、武村哲浩 実行委員(金沢大学)に心から感謝します。

JRC2017が若手研究者を育てる切っ掛けとなり、そこから派生する研究成果が未来の医療に真に役立つことを願ってやみません。

